

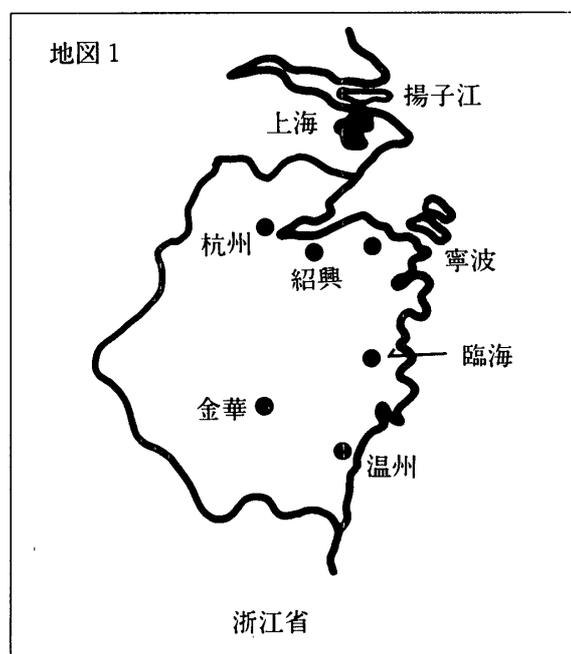
# 現代中国農村における宗教復興<sup>1)</sup>

## 秀村研二

### 一、はじめに

中国では一九七八年以降にいわゆる改革・開放政策という政策の変更に伴って、市場経済原理の導入などによる社会の変化とともに、また宗教に対する規制も緩和されてきている。とくに文化大革命の中で禁止されていた信仰が息を吹き返し、破壊された寺廟が再建・修復されてきている。歴史的にも有名な寺廟が復元され人々を集めているだけでなく、村落レベルでもその人々に信仰されてきた寺廟もまた復興し、信仰を集めてきている。本論はこのような現代の中国社会における宗教の復興の実態を、浙江省のある農村の事例によって示すことを目的とする。

本論でとりあげる事例のほとんどは浙江省臨海市東塍鎮における調査において得た資料によっている。<sup>2)</sup> まず臨海市東塍鎮の概況について



農村である。行政的には臨海市のさらに大田地区に属する。東塍鎮は十七の集落からなり、人口は一九八九年現在で二万二千人ほどである。鎮の中心は上街・中街・下街であり鎮の人民政府も下街におかれている。この三つの集落は連続していて、漢南街というメインストリートを中心にして清朝の雍正帝時代に作られたという家屋が両側に軒を並べている。そしてその漢南街を中心として五日ごとに定期市(旧暦の二と七の日)が開かれる。現在ではこの古い家並を取り囲むようにして家屋が建てられ、北側に新しい自動車を通れる道が作られ人通りも通常はそちらのほうが多い。生業のほとんどは農業で、稲作と裏作として麦作がおこなわれている。稲作は一九五八年以降は二期作がおこなわれている。また蜜柑の栽培も山麓でおこなわれている。経済活動は盛んで、郷鎮工業といわれる工場も増えている。

述べておく。浙江省の省都杭州から自動車で八時間ほどで浙江省台州地区の中心都市である臨海市に着く。臨海市全体で人口は百万人ほどである。東塍鎮は臨海市の中心から十六キロほど東北に位置する



を読む「宿夜」(「務寿」ともいう)をしていた。また願い事があるときや病気になるたときには石板殿の神を拝して、香炉の灰を持ち帰って水と一緒に飲んだ。また正月の十五日の夜には「請平安」といって平水尊王と白衣土地爺が祀られ、道士がその年の作物と各姓氏について占い、また村人一人一人の運勢についても占った。一月二十一日の白衣土地爺の祭日には「宿夜」とともに、その夜から三日間ほど劇台で劇(越劇)が演じられた。この越劇は文革中は中止されて京劇的な現代革命劇がおこなわれていたが、いわゆる四人組の失脚した後の一九七六年には越劇として復活した。また平水尊王は水の神として干ばつときには東勝鎮だけでなく、周囲の他の村々の人々によって「取水」(雨乞い)がなされた。

現在では石板殿には、平水尊王・白衣土地爺・太保爺が祀られているが神像はなく赤い紙(紅紙)に神名が書かれている。文革以前と同じように旧暦の一日と十五日に人々がロウソクと線香を持ってきて拝拝はするが、その他の祭祀はおこなわれていない。まだ神像を復元する計画はないという。

上街の老爺殿は趙元帥老爺殿という。下街の老爺殿に比べると規模は小さい。祭日は三月十五日。文革のときに神像は破壊され、建物は生産大隊の休息所として使用されていたのを一九八八年に上街の婦人たちが費用を出し合って買い戻して、神像や祭壇をおいた。それで以前は上街の老爺殿であったのが現在は費用を出した人々の所有になっている。現在では一日と十五日に拝拝がなされている他に、三月十五日の祭りと九月十九日に「宿夜」がなされている。

## ② 村落を越えた寺廟

村落を越えて信者を集める寺廟としては、蓮堂・紫坊堂・聖堂・雲

岩寺・香火岩寺がある。ただし紫坊堂は一九五八年以前に建物もなくなり現在は畑になっているのでここでは取り扱わない。

蓮堂は以前は建物の中央部分に仏像が祀っており、尼がいた。文革のときにやはり仏像などは破壊され建物は住居となり、現在五家族が住んでいる。以前ここで蓮堂を守っていた尼の養女が住んでいて、文革が終わると、他の人が文革中も隠し持っていた観音像を譲り受けて建物の片隅に祀っている。現在は、観音像を中心として財神爺と土地爺が並べられている。以前は人々が拝拝しにきていたが、現在は主にここに住んでいる人たちによって、一日と十五日に拝拝がされている。九月十九日が観音の祭日で「宿夜」がおこなわれ、このときには他の人々も訪れる。

聖堂は観音と財神それを尼がいて祀っていた。それぞれ別の場所に祀られ、普通は聖堂というところを観音を祀っている尼がいるところを意味し、魁神を祀る場所と同じ建物だが別の部屋で文昌閣と呼ばれていた。財神は財神殿という聖堂の前にある建物に納められていて、一月十五日には引き出されて東勝鎮全体(現在の上街・中街・下街)を担がれて廻った。財神を迎えた家では爆竹を打ち鳴らして年長者が線香を持って拝拝し、財神の前に立つ人が持っている皿にある紅紙に包んだ銅銭を同じように自分の家で用意した物と交換する。これを衣服の箱(衣箱)に入れておくが、神が与えてくれたもので豊かにさせてくれるものと信じられていた。また七月十五日は「七月半」といわれ聖堂の茶亭(観音が祀つてある建物の中の部屋)で野鬼(祀る子孫のない死霊)を祀る「做道場」が僧と道士それに年輩の婦人たちが集まってなされた。文革のときは神像は破壊され、建物は住居とされた。現在では住居と倉庫として使用されていて宗教的なものはない

もないが、この建物のことは聖堂として認識されている。一九八九年から「七月半」が、以前僧として次に述べる雲岩寺にいた男性を中心にして、年輩の婦人たちによってなされた。

雲岩寺はかつてはそれぞれ観音・釈迦如来・金剛を祀る建物が3つ並んで建つ大きな寺であり僧も百人ほどいたという。解放から次第に寺に対する圧迫が強まり文革の頃には金剛を祀る建物だけが残っていて僧も十人ほどに減っていた。仏像は解放後に失われ建物は文革で破壊され畑にされてしまった。雲岩寺の信者は以前から女性が多かったとい、彼女たちは解放後や文革時代をとおして信仰が禁止されても信仰は失わなかったと語る。開放政策が始まった後、一九八四年から現在の東勝鎮の中街に住むある女性（七六歳）を中心として雲岩寺の再建が計画され、各集落に数人の中心人物を置いて資金を集めていった。この資金を集めるための活動の範囲は東勝鎮以外の他の郷にまで及んだという。資金を出したのは過去に雲岩寺に通っていた年輩の女性たちであり、また彼女たちは子供たちからも資金を提供させたのであるがこの子供の世代が文革のときに雲岩寺などを破壊した世代に当たる。

一九八九年の十二月に雲岩寺は再建されたが、資金の関係上簡単な建物で、仏像もない。祭壇の上には釈迦如来と観音の絵がおかれている。また以前観音を祀っていた建物には十八羅漢が祀られていたことから、壁に沿って線香が十八箇所捧げられるようになっていた。かつては観音の裏側に赤脚大仙が祀られていたので観音の裏側には線香が供えられる。旧暦の一日と十五日に午前中から主に年輩の婦人たちが集まり経を読み、「経朝」という紙の死者のための錢を折る。三十分一度くらい鉦や木魚を鳴らして全員で経があげられる。この間に思

い思いに祈禱されるが、まず建物の入り口から外に向かい線香をもって天地爺に拝拝をし、それから仏に拝拝される。この間昼食も用意され全員で食事がとられる。だいたい、いつも八十人から百人ほど集まるといふ。

香火岩寺は雲岩寺から山道を二十分ほど登った山の中腹にある小さな庵である。香火岩寺といわずにただ香火岩と呼ばれることも多い。清朝時代に建てられたようでそれに関する伝説が残っており、それちなんて名がつけられている。ここに祀られている神は、観音・白衣大使・玉女・善財童子・土地公・送子娘娘である。また建物の外に龍井と呼ばれる井戸があり、龍に対して線香が供えられる。旧暦の一日と十五日に人々が集まり経をあげるほか、三月十八日、六月十八日、九月十八日、大晦日が祭日となっており「宿夜」がおこなわれる。解放以前よりここには神に祈願することがあるときに来るとよいとされ、とくに病氣や子供が欲しい人が来るといふ。祭壇の前に籤がありこれによって占う。ここも文革中に破壊されたが、一九八四年にやはり年輩の婦人たちが中心となって資金を集めて再建された。そして一九八九年に倍の大きさに増築されている。雲岩寺に来る人々と香火岩寺に来る人々とはほとんど重なっていて、片方に来た人はもう一方にも行くことが多いようである。「宿夜」にはほとんどが女性だが八十人ほどが来て、若い人々も見物がてらに来る。来る人々は夕刻に食事の材料を持ち寄り、皆で食事を作り一緒に食事をとる。「宿夜」に来て居る人の中には若い人も含めて体が丈夫になるようにと願って来る人が多い。

キリスト教会は文革以前は教会堂はなく個人の家で日曜日に集まって礼拝をおこなっていた。一九五八年に禁止されたが、それ以前には

だいたい百人から二百人の信者が集まっていて、クリスマスなどのときは三百人以上になったこともあるという。牧師はおらず教会の指導者のな人が礼拝の説教をおこなった。文革中には聖書・讚美歌は没収され焼かれた。文革中には夫婦の間でもキリスト教に関する話題は避けられたが、信者たちは一日に数度は黙禱をして神に祈ったという。一九八二年に数人で集まり礼拝を復活することが計画され、かつての信者の中心として呼びかけがなされ最初の家庭礼拝には百人ほどが集まった。そののち信者は増え、とくに若い人々が集まっており現在では四百人ほどになっていて、一九八九年に教会堂として建物を購入した。現在はまだ牧師はおらず洗礼や聖餐式ときには臨海市の教会から牧師がくるが、通常は教会の中心的な人々が交代で説教をしている。

### ③ 姓氏の祠堂

前述のように東勝鎮の有力な姓氏にはそれぞれに祖先の位牌を祭祀するための祠堂があった。一番早く来住したといわれる周氏の場合には、分節した子孫たちが祀る小祠堂まであった。祠堂での祖先祭祀は冬至の日の昼間におこなわれる「冬至酒」といわれる儀礼で、供物を供え姓氏の男性は子供も含めて全員が祠堂で位牌の前にひざまずき、信仕（姓氏に数人の代表者がおり信仕という）が祭文を読み、全員が三回頭をさげる。その後、饅頭が配られ家に帰り昼食をとり、夕食は各姓氏の成人男子（十八歳以上）が各姓氏ごとにある家に集まって会食をした。

文革の時に祠堂は紅衛兵によって襲われ位牌は引き出されて焼かれた。いくつかの祠堂は破壊されて残っておらず、現在東勝鎮に残る祠堂は潘氏祠堂、周氏の小祠堂、趙氏祠堂だけでこれらは現在倉庫にな

ったり住宅として使用されている。現在は葬式の時に位牌は作るが葬式が終わると焼いてしまうので位牌が祀られることはない。各姓氏の人々、とくに老人たちには祠堂を復活したい気持ちがあるが、かつて有力な姓氏はさまざまな利益をめぐって争い、時には暴力沙汰になったこともあり、姓氏の統合の象徴ともなる祠堂を他の姓氏に先んじて復活させることにはためらいがみられる。

これと対照的な例として、東勝鎮に属する山根という村落の例を述べる。三百人ほどの村落であるがほとんどの人々は卢氏である。以前は祠堂があり位牌が祀っており、七月十五日と冬至に祠堂に集まり祖先を祭り食事を共にした。それぞれ「做月半」と「冬至酒」という。位牌は文革の時に紅衛兵によって焼かれてしまい、それから祠堂は卢氏ではない身よりの無い人に提供されて住居とされた。ここでは一九九〇年の「做月半」が復活され、「冬至酒」もおこなう予定であると聞かされた。祠堂はまだ復活していないが、資金ができれば買い戻す計画である。またこの村では廟の復活にも熱心で、文革で破壊された神像の位置にその神の姿を布に描いた画像を屋根から吊り下げ、資金ができれば神像を作る予定にしている。

### ④ 家庭で祀られる神

家屋の中心である中堂の上には祖先の位牌と観音それに土地爺が祀られていて、正月・清明・冬至にはそこに住む家族で祀った。また同じ家屋に住んでも各家族は台所を別にするがその台所のカマドには灶神（灶司爺や灶事菩薩ともいう）が祀られていた。これらは文革の時に迷信ということで破棄させられそれからは祀ることはできなかった。前述のように位牌は現在では葬儀の後に焼いてしまうので祭られることはないが、他の神々は復活してきている。

灶神をかつて祀っていた跡は古い家のカマドにはほとんどそのまま残されており、その家族の主婦が年輩でしかもそのようなことに熱心であるならその場所に線香を供えたり、また神像や灶神を描いた紙を置いて祀っている。一九八〇年代になって復活してきて、八〇年代の後半になって神像を描いたものが売られるようになってから祀る人が増えたという。多くの場合毎月一日と十五日に線香とロウソクをあげ、大晦日・正月十四日の夜・冬至には特別に供物を供える。また収穫された新米を炊いて「上新米」として供える。しかしその場所は残されていても、関心のない人の場合にはそのままにされている。

また灶神以外にも家庭で神が祀られる場合がある。五一歳のある女性には家族の運が良くなり、子供が健やかに成長するようにと赤い紙（紅紙）に神名を書いて壁に貼りその前に簡単な祭壇を作り、毎日線香とロウソクをあげている。

また四十代のある女性は以前は全く神仏を信じる気持ちはなかったのであるが、結婚した夫の母親が熱心に信じているのに影響されて一九八七年に建てた新しい四階建ての家に祭壇を作り、やはり赤い紙に神名を書き祀っている。神を祀るようになった理由は、体が丈夫でなかったためだという。その神名は家堂土地之神・観世音之神・財神爺之神・十連童子之神・三宮大帝之神・全堂仏祖である。毎日拝むことはしないが、一日と十五日には線香とロウソクをあげ、供物を供えて拜む。主に子供の成長や家族のことについて願う。また他に何かある時には拝拝がなされる。例えば夫が遠方にでかけるときや、この家では井戸の水を屋上のタンクにポンプで汲み上げているのだが、そのポンプの調子が悪いときなどにもおこなわれた。実際、水が良く上がるようにと神に願ったらポンプの調子が良くなったと彼女は語った。ま

た体の調子も神を祀るようになってずいぶん良くなったという。

このように家庭で神を祀ることがおこなわれているのだが、定期市では観音の小さな像などが売られており簡単に手に入れることができる。

#### ⑤ 宗教職能者

宗教職能者として人々によって語られるのは、道士・風水先生・童身・巫婆などである。道士は東勝鎮には一人いて老爺殿や聖堂での儀礼で役割をもったり、難産の時に符を書いていたりしていた。しかし文革でいなくなり現在ではかつて道士が役割を果たした儀礼が復活しても道士役はないままで済ませている。例えば葬送儀礼で出棺して七日目を頭七、三番目の七日目を客七（婚出した娘が道士を呼ぶ）、五番目の七日目を子孫七（息子や子孫が道士を呼ぶ）といい、それぞれ中堂で道士が経を読んで死者にあの世に行く方向を示していたのだが（開路七）、解放後には迷信とされ現在では七日目に紙の位牌が焼かれ、以後の儀礼をおこなわなくなった。

風水先生には日取りや方角を占ってもらうことが多く、とくに婚姻にまつわる婚約や婚礼の日取りやまた葬礼に関連する日取りや方角を占ってもらう。日子先生ともいわれる。解放後から日取りをみてもらうことは少なくなかったが、葬式の時の出棺の日取りなどは現在でもみてもらう。日子先生と呼ばれるような知識をもった人はいなくなつたので東勝鎮では目の見えない人（瞎子）に日取りを占ってもらう。時には運命を占ってもらうこともある（算命）。

童身は男のシャーマンで老爺の霊を降ろすことができたといひ解放以前に活動していた。通常は農業をしていたが依頼があると老爺殿で降神をおこない、主に依頼者やその家族の運や病気に関して語った。

童身は自分の家には神を祀ってはおらず、かならず老爺殿でおこなったという。また日常の会話では方言しか話せなかったのに神が憑くと標準語を話すことができたという。この童身は解放後は迷信として活動は許されず一九八六年に死亡した。

同じシャーマンでも女性の場合には巫婆といわれる。童身とは異なり自分の家でおこなう。以前から巫婆はいたが文革で途絶えてしまっていた。それが近年になって復活してきており東勝鎮でも五人ほどいるといわれている。次に示す例は四八歳の女性の例で東勝鎮では一番評判のよい巫婆である。

彼女は東勝鎮の南の邵東郷東井頭村の出身で、十八歳で見合い結婚をし東勝鎮にきた。二七歳の時に頭痛がひどく、ものが考えられなくなり精神病院に入院させられた。それでも治らなく家に帰っても自分の体が飛んでいるような気がし、毎晩夢で神が語りかけてきて「お前は病気ではなく私の魂が入っているからだ。観音と釈迦とを家で祀ると一家が平安となる」と語りかけ、龍が天上から降りてきて龍の玉が家に落ちたり、また七仙女が天上から降りてきたり、多くの楊家将が降りてくる夢を見た。すぐには信ぜずまた釈迦や観音を祀ることもしなかった。三二歳の時に人々が神が憑いていると行って訪ねてくるようになった。その時に人の病気を治すことができても自身でも信じるようになり釈迦と観音を祀るようになった。それから体の具合は良くなったが、まだこのような「迷信」をやつてよいのだろうかという恐れがあった。しかし夢の中で「恐れるな」との神の言葉があった。夫は心配しました反対した。しかし夫の病気を治してからは反対しないようになり、雲岩寺を再建するときなど

には夫は手伝いに行くようになった。もしも自分が神に仕えることを止めるとまた病気になるかもしれないので、続けてやつていくつもりである。来るのは主に病気の人がやつてくる。病気や運が良くない人にはその人の祖先に子孫を守ってくれるようにと頼む。病気の人には祭壇の線香の灰を水に溶いて飲ませると良くなる。人が来るのは主に定期市の日で、その時には遠くからも来る。その日には自分は経を読めないのに経を読める人に来てもらっている。お礼は病気が治つてからお金などでもらっている。

彼女は家に祭壇を作りそこに釈迦と観音とを祀っているが、自分の守護神であるという「楊家将」は祀っていない。祭壇には彼女によって病気が治つた人々が奉納した赤い布が多く吊り下げられている。また死者の霊を呼び出すことがあるというが、死者の霊が憑依した時には彼女もあの世に行ってしまうので息ができなくなってしまうという。

彼女は簡単にトランス状態になる。まず吐き気があり目を閉じて歌を歌う。また吐き気があつてから神が降りてきて言葉をいう。そして歌と言葉それに吐き気とあくびが数度繰り返される。最後は吐き気と大きなあくびによって醒める。特徴的なのは歌われる歌と言葉で、その節まわしや語り方は越劇のものそのものである。東勝鎮では越劇が好まれているが、以前の巫婆も越劇のような節まわしや語りであったかどうかは不明である。

### 三、東勝鎮における宗教の復興

以上簡単に東勝鎮における現在の宗教の状況についてみてきた。開

放政策によって文革時代に規制されていた宗教が、ある程度規制の緩和によって復活してきているのであるが、それは文革以前の宗教・信仰への回帰を意味するものなのであろうか。それについて前述のように東勝鎮の宗教を、村落の廟・村落を越えた寺廟や教会・姓氏の祠堂・家庭で祀られる神・民間職能者というレベルでみて、その復活のあり様について検討を加えてみることにする。

まず村落の廟であるが東勝鎮では、上街でも下街でも毎月一日と十五日に人がきて拝されているものの、石板殿では神像も復活されておらず、かつておこなわれていた祭日や「宿夜」もおこなわれていない。またくる人々も年輩の女性たちが主である。東勝鎮の中で上街から東に歩いて二十分ほどの格溪沈という村では、文革中に破壊された村の廟を一九八六年に神像を含めて復活させている。ここでは「宿夜」もおこなっている。このような違いはどこから起こっているのだろうか。かつては東勝鎮の上街も下街もいくつかの大きな姓氏によって運営がなされていて、下街の場合では周・趙・桜の三姓氏が持ち回りでさまざまな行事の費用を分担していた。それが解放後なくなり、文革の破壊から、神々に対する敬神の念がよみがえってもそれは個人的なものであり、姓氏や村に関する儀礼は復活していない。格溪沈村ではほとんどが一つの姓氏であるので、まとまりがよく現在では村の廟ではないのにもかかわらず費用が集まったのである。東勝鎮でみるなら復活後の廟は、かつての第一義的に村の平安のために機能していた廟から個人的な信仰の対象へとその性格が変わったといえよう。

次に村落を越えた寺廟であるが、これには文革後に復活した雲岩寺と香火岩寺それに蓮堂がある一方、聖堂は復活しなかった。聖堂につ

いてはかつていた尼が文革でいなくなっている人々はその後に住んだ人々であることが大きいと思われる。同じように尼がいた蓮堂でも文革で住宅とされたのだが、尼の養女が住み続けていたために復活は容易であったろうと考えられる。雲岩寺と香火岩寺は前述したように年輩の女性たちの熱心な努力によって復活がなされた。またそれだけに雲岩寺や香火岩寺は彼女たちにとって意味のあるものであったといえることができる。祀られている仏や神々は像は今はまだないにしても、できるだけ元のとおりに祀ろうとしている。そこでは仏教・道教の神々が一緒に並べられ、「神々の連合国」といわれる他の地域の漢民族の祀り方と同じ状況が出現している。彼女たちは神々が仏教や道教の神だから祀っているのではなく、彼女たちに利益があるから祀っているのである。

これらの寺廟に対してキリスト教会は全く性格が異なる。文革以前は教会堂もなく個人の家で礼拝をしていたのが、現在では信者数も多くなつて教会堂を持つほどになった。さらに教会には若い人々が来ている。一神教であるキリスト教が信者数を増やすのは何故であろうか。これは東勝鎮だけで見られる現象ではなく、浙江省の他の農村や漁村でも大きな教会堂をみかけた。伝統的な宗教信仰ではなく、また共産主義とも違う、新しい価値としてキリスト教は捉えられていて、それで多くの特に若い信者を獲得しているのではなからうか。

東勝鎮では姓氏の祠堂が復活する様子が見られない。前述のようにいくつかの姓氏がいるので、姓氏を統合するような祠堂の復活は難しい。それに位牌は以前は二枚作って一枚を中堂に一枚を祠堂に納めていたのだが、現在は葬式の後で焼くようになって位牌自体に対する関心がなくなってきた。文革の影響は以外と大きいのかも知れ

ない。前述の山根村のように、同じ姓氏がほとんどである村落では祠堂や祖先祭祀である「冬至酒」が復活しているが、東勝鎮ではその動きはない。

家庭で祀られる神のなかで多いのは、筆者のみた範囲では灶神が多かった。ただやはり年輩の婦人たちの家であり、若い人々は竈に灶神をかつて祀っていた場所がそのままに残されていても無関心である。また灶神以外の他の神々が祀られることがあるがこれも主婦たちによっていることが多い。

宗教職能者はかつていた男性の道士・風水(日子)先生や童身といわれるシャーマンはいなくなっている。道士や童身は活動の場が老爺殿であり、また文革中に禁止され、忘れられていた。それに対して女性のシャーマンである巫婆は文革中の伝統の中断にも関わらず復活している。前述の事例のように、彼女が巫婆として活動する前から人々が彼女のもとに来たということは、巫婆を待ち望んでいた、必要とする人々がいたということである。

中国社会は、共産主義革命(解放)・文化大革命・経済開放政策などにもなつて大きな社会の変革を経験してきている。宗教も無縁でなく解放後規制が強まり、文革中は宗教活動は中断させられた。開放政策によって宗教が復活してきたのであるが、それが以前のものへの回帰なのかどうなのかについて最後に述べて終わりとする。

確かに東勝鎮の場合、雲岩寺や香火岩寺の祭日や神々の祀り方をみると、できるだけ以前と同じようにしようとする意識が働いているように思われる。しかし一方で老爺殿での村の公的な儀礼はおこなわれず、また姓氏の祖先を公的に祀る祠堂も復活しておらず、一族の祖先祭祀である冬至酒も復活していない。それに対して、聖堂で野鬼を祀

り慰勞する「七月半」がなされるようになったのは示唆的である。また死者との関わりでいえば、死者がああ世で苦しんでいるのを夢みて、香火岩寺で死者のために供物と紙銭である「経朝」・「千張」を供えている人がいたり、巫婆が死者の霊とも関わることも覚えておきたい。村であるとか姓氏であるとか公的な性格を持つものと同関わるものは復活せず、個人的もしくは家族に關連する願いを中心とするものとして宗教が復活しているとみることが出来る。そこでは病氣や健康、家族の安全、事業がうまくいくことなど現世利益的なことが祈られるのである。神・鬼・祖先という漢民族の宗教観念において、東勝鎮の場合には現在までのところでは、祖先が抜け落ちる形で宗教の復興がなされてきているということが出来るのかもしれない。

また伝統的宗教とは異質でありながら人々を集めているキリスト教の存在は興味深い。若い信者が多いだけに新しい個人の救済の宗教としてキリスト教が受け入れられていくのか、他の神々と同じように「神々の連合国」の一つになつていくのかは今後の問題である。

#### (一般教育 講師 文化人類学)

註

(1) 本論は第四三回日本民俗学会年会(一九九一年、於國學院大学)において「中国浙江省の宗教事情 臨海市東勝鎮における宗教復興の現状」と題して発表したものの一部である。なお本研究は文部省科学研究費による「越系文化の比較研究」(研究代表者 鈴木満男)の一環としてなされた。

(2) 調査は一九九〇年十月二十一日より十二月一日までであったが、このうち東勝鎮には十月二十五日より十一月二十日まで滞在した。なお調査は日本語と現地語から標準語への通訳二人を介しておこなったため、調査としての限界があった。

(3) 越劇とは十九世紀後半より今世紀の前半にかけて上海を中心とする地方で完成されていった演劇の様式である。最初は男性でなされていたのが一九二〇年代から三〇年代にかけて女性が

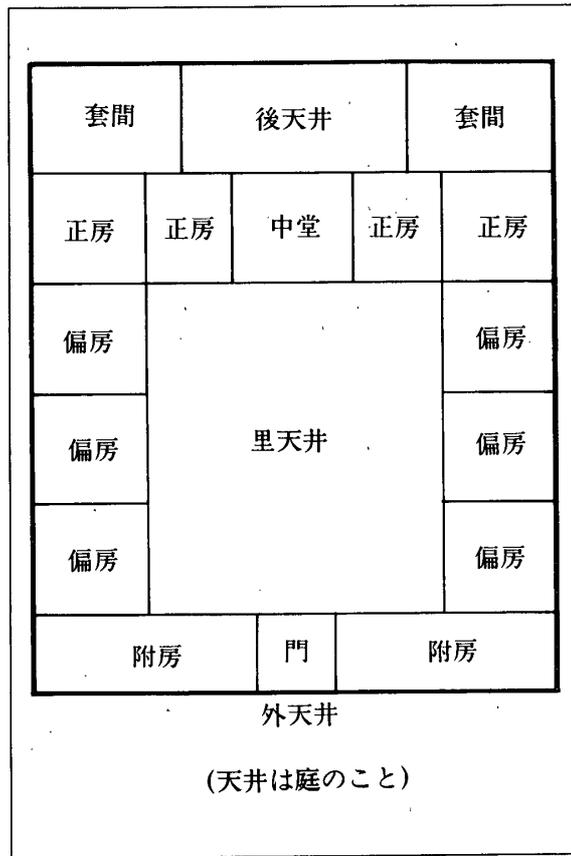
演技するものとなり人気を得るようになった。(錢法成編『中国越劇』)

(4) 本論で述べる祭日などの日には全て太陰太陽曆によるものである。東勝鎮では公式的には太陽曆が用いられているが、定期市の日を含めて行事には太陰太陽曆が用いられる。

(5) 筆者の調査に同行した共産黨員や通訳たちは宗教に対して「迷信」だとして冷淡な態度をとっていたが、籤にだけは関心を示し喜んでやっていた。

(6) 現在でも聖書・讚美歌は不足して持っていない人は少ない。

(7) 東勝鎮ではかつて古い家では同じ家に親子兄弟が一緒に住み、四世代が同居することが理想とされた。そのような家屋の例を一例あげるが、この家には八家族三七人が住む。一族だけ血縁関係がないが、これは共産革命後の土地改革の時に住み込みの下女に一番良い部屋を与えられその子どもと孫たちが住む。



(8) 漢民族の宗教はしばしばシンクレティズムであるといわれるが、それよりは人々がその時の必要に応じて一番効果のよい神々に対して選択的に接している(渡辺欣雄『漢民族の宗教』)。

参考文献

窪 徳忠、『道教の神々』、平河出版社、一九八六年。

中野謙二、『生活と宗教』、野村浩一他編『もつと知りたい中国II』、弘文堂、一九九一年。

渡辺欣雄、『漢民族の宗教 社会人類学的研究』、第一書房、一九九一年。

錢 法成編、『中国越劇』、浙江人民出版社、一九八九年。